

Dies: Frauemärchen. In: Enzyklopädie des Märchens. Band 5, 1987, S. 211-220.

Köhle-Hezinger, Christel; Scharfe, Martin; Brednich, Rolf Wilhelm (Hg.): Männlich - Weiblich. Zur Bedeutung der Kategorie Geschlecht in der Kultur. Münster (Waxmann) 1999.

Köhler-Zülch, Ines; Shojaei Kawan, Christine: Schneewittchen hat viele Schwestern. Frauengestalten in europäischen Märchen. Gütersloh (Gütersloher Verl.-Haus Mohn) 1988.

Lipp, Carola: Geschlechterforschung - Frauenforschung. In: Brednich, Rolf W. (Hg.): Grundriß der Volkskunde. 3. überarbeitete und erweiterte Auflage. Berlin (Dietrich Reimer) 2001, S. 329-361.

Moser-Rath, Eilfriede: Frau. In: Enzyklopädie des Märchens. Band 5, 1987, S. 100-137.

Roth, Klaus: Mann. In: Enzyklopädie des Märchens. Band 9, 1997, S. 144-162.

Wehse, Rainer: Männermärchen. In: Enzyklopädie des Märchens. Band 9, 1997, S. 222-230.

(おみや・おみ) / 白百合女子大学)

シンポジウム / 口承研究と女性

## 「昔話の語り手」と女性

藤久 真菜

### 1. はじまり

「口承研究と女性」と題するシンポジウムに向けて、二〇〇六年秋からプレ研究会をもち、二〇〇七年春の当日をむかえた。「女性」をテーマに掲げるシンポジウム開催は、日本口承文学学会にとつて初めての「こころみ」である。初めてとはいっても、学会誌をひらいていくと、萩中美枝氏「ユーカラと女」(五号)、加藤千代氏「中国の『都市新伝説』―男と女の話を読む―」(十四号)、野村敬子氏「外国人花嫁」の民話について」(十八号)、そして最近では、山田巖子氏「聴く力―丸山久子の昔話調査―」(二十号)と、フィールドや関心はそれぞれにちがっていても、「女性」という切り口をもつ個々の論考の蓄積が、見てとれる。今回のシンポジウムは、複数の人たちが共通の問いかけのもとに集まり、議論をかさねるというかたちで「女性」を取り上げる、そのはじまりである。

シンポジウム直前のある日、電車の中で、雪ふりつもる合掌

造りの家並みの風景に、「まるで昔話のような世界。ふと母を思った、わたしがいる。」というキャッチコピーをつけたポスターと乗り合わせた。<sup>(1)</sup>「昔話のような世界」と「母」とが、ふとつながっていく。このポスターから四十年前の昔話集をひらくと、「昔話の語り手といふと、老婆の姿がまづ浮んで来る<sup>(2)</sup>」と、「昔話の語り手」から「老婆」への連想が述べてある。「昔話のような世界」「昔話の語り手」と「母」「老婆」といった女性たちとの連なりの糸を手がかりとして、「口承研究と女性」への私なりの道すじをつけ始めていきたい。

## 2. 「昔話の語り手」としての女性

「昔話の語り手」について、男性と女性とを対比しながらとらえた記述を、私たちは、しばしば目にする。たとえば、事典には次のようにある。

語り爺と語り婆をくらべると、語り婆は語り爺よりも一般に本格的な昔話の内容と形式をもち、語り爺は笑話・世間話・伝説を得意とすることが多い。これは女性は多く家や村の生活を受け持ち、伝承した昔話をあためたためて幼児に語り聞かせることが多く、男性は青少年期から家や村を出て外で見聞を広めていくことが多いという生活の相違によることが考えられる。その結果として、いわゆる100話クラスの伝承者といわれる語り手は圧倒的に語り婆に多いことになっている<sup>(3)</sup>。

「語り爺」「語り婆」としての男性と女性とをふちどる基本線が引いてある。

昔話の語り手は男性よりも女性が多い、という。「すぐれた昔話伝承者タイプは女性に多く、しかも老女たちである。私の昔話採集は、現在、老女の伝承者だけを対象にして探している<sup>(4)</sup>」と言いつける水沢謙一氏の報告は、この記述を補強する。さらに、数の上だけでなく、「女の語る話は、伝承に忠実で、きめが細かく、本格昔話も多く、語り方もよい。男の語る話は、大ざっぱで、あらずじで、説明的で、語りにならない<sup>(5)</sup>」と、語り手としての優劣の上でも女性たちを重視する。

「伝承に忠実」な女性というとならえ方は、昔話研究のはじまりの頃から、ついてまわる。「忠実に古風を守らうとする」女性たち<sup>(6)</sup>、「大凡古き傳承を忠實に傳へようとし、また優れた傳承者の多かつた」婦女子たちを男性と比べた結果、「特に女性の傳承者の發見は、昔話採集に甚だ必要<sup>(8)</sup>」なこととされる。

それにしても、「傳承者」としての女性の姿がひときわ印象深く残るには、どのような経緯があったのか。海をわたって翻訳紹介された民俗学の理論との連動を、ひとつには考える<sup>(9)</sup>。けれども、それだけではなく、「傳承者」としての女性たちの印象は、「昔話の語り手」としての女性たちのそれとかさなりながらも、ひとり昔話研究の世界にとどまらず、深まっていったのではないだろうか。もう少し、考えていきたい。

### 3. 「伝承経路」再考

前節で挙げた『日本昔話事典』の記述にもどると、女性たちは「伝承した昔話をあためて幼児に語り聞かせる」ことが多くあった。誰に語るか、誰から聴いてきたか。私たちが「伝承経路」と名づけて、探ってきたところと関わる。具体的なフィールドからは、どのような報告がとどいているのだろうか。

「伝承経路は、まずもって祖母、ついで母と、女性が昔話管理の主役であった」と報告するのは、『信濃の昔話<sup>10</sup>』である。「祖母伝承の典型」としては、「祖母まんさん（幕末生まれ）から、同じ蒲団に寝ての、寝物語に聞いた」という篠原保夫さんを紹介する。次いで、「伝承経路は、ほとんど母親であった」という吉越啓作さんが挙がる。篠原さんと吉越さんが昔話を聴かせてもらった相手は、祖母であり、母であり、女性である。しかし、今、フィールドワーカーたちを前にして、その祖母なり母なりから聴いた昔話を口にしてるのは、ともに男性であることが、ふいに目にとまる。篠原さん、吉越さんの「伝承経路」からは、「女性が昔話管理の主役」であるという見方だけではなく、祖母から孫息子へ、母から息子へ、女性から男性へと性別を交差させて、昔話を聴かせていくありようを見てとることのできるのではないだろうか。

『日本昔話事典』の巻末に載った「百話クラスの語り手」たちは、総勢四十三人。そのうち、女性は三十二人、男性は十一

人（水沢謙一氏が調査責任者もしくは昔話集編者となっている「百話クラスの語り手」は十六人で、うち女性は十三人）の内訳である。そのひとりひとりが、誰から（誰と）、どんな時に、どんな場所で、どんな昔話を聴いてきたのか、資料集にあたってたどるのは、興味のつきない作業である。主に誰から聴いたのかをいくつか見ていくと、たとえば、永浦誠喜さんは、姉のきみえさんと一緒に、祖母、ついで母から、多く昔話を聴いている。笠原政雄さんは母から、小島頼雄さんは祖母から、主に聴いている。波多野ヨスミさんは父親から、賀島飛左さんは祖父からの昔話を、一番多く聴き覚えていた。女性から男性へ、男性から女性へと聴かせていく「伝承経路」をあえて取り出してみた。「百話クラスの語り手」として事典に並ぶ人たちの姿だけを見れば、たしかに「圧倒的に語り婆に多い<sup>3</sup>」。けれども、誰から聴いたかというところまでかえてみると、男性から聴きつたえている女性の姿も浮かんでくる。

昔話研究の黎明期にあつて、それに取り組み始めた人々——多くの場合は男性たちであつた——が世に送り出した昔話集には、自らの母親や祖母からかつて聴いた昔話を紹介したものが、しばしばあつた。土橋里木『甲斐昔話集』、関敬吾『島原半島民話集』、山下久男『加賀江沼郡昔話集』などである。雑誌『昔話研究』に各地から集まった資料報告を見ても、同様の事例は多い。

「伝承経路」は、誰から聴く／誰へ聴かせるといふ、発し手と

聴き手と両方をふくみこむ。そのどちらかに重心がかかることで、「昔話管理の主役」としての女性たちや、「圧倒的に」多い語り婆たちが見えてくる。そこを、考え直してみたい。前掲「百話クラスの語り手」たちの一員である、土田アサヨさん、マサエさんは、「むかし」を「祖母のサヨ及び婢であった元吉翁から受容した」。そう示しながらも、「村でも有名なむかし爺っちゃん」だった元吉さんよりも、女性であり家督相続者でもあるサヨさんのほうへと重心をうつして、「代を継いでの女性の管理」を推測する。「昔話管理の主役」としての女性、代々とつづく「女性の管理」を見通すかたわらで、元吉さんからアサヨさん、マサエさんへとつたわる「むかし」もあり、男性から女性へ、女性から男性へと、はたらきかけていく「経路」もつづいていく。

#### 4. 男と女と—男語り／女語り、男話／女話

女性から女性へと連綿とつづく昔話の系譜を、「女語り」と呼ぶのだろうか。それとも、語り口を指すものだろうか。<sup>(13)</sup>「男語り」「女語り」という語には、使い手によって用法のずれがある。どんなありようをとらえようとこの語を用いてきたのか、また、用いることができるのか、考えていく必要がある。

『陸奥二戸の昔話』によると、「瓜子姫の話」「まます話」を例として、「昔話管理の方法」にも、男女の担当する話の区別があった<sup>(15)</sup>ことを示唆する。女性には女性の担う話があるののだろうか。関敬吾氏が「話者によつて話題と説話内容に相違はない

か。祖父母がその孫に、父母がその子に語る場合と、婦女子のみが、児童のみが、或は屈強の男子のみが語る場合に無意識にせよ話題の選択はなかつたか」と投げかけたところと通じる間いである。

特に「まます話」については、女子は「糠福と米福」「お糸唐糸」のような「まます話」を好み、婆は「継子譚とか蛇婢入りのように静かで温和しい口調で語る」と、女性と結びつけた報告が複数ある。一方で、女性ならば皆が皆「まます話」を好んで口にするというわけでもない。プレ研究会で、自身を「託して」のせていくからこそ、ひとりひとり覚えている話にレパートリーの偏差が生まれると、山田巖子氏の発言があつた。<sup>(19)</sup>「まます話」にみずからを「託して」口にする人もいれば、そうでない人もいる。「むずせ話しばしてけるや」<sup>(20)</sup>とせがむ女性もいれば、「むずせ話し」を拒む女性もいる。そのひとりひとりから考えていく道すじをも、ひらいていきたい。

「昔話の語り手」をめぐる女性や男性のとらえ方をさらいながら、資料をわたつてきた。「母」であつたり、「老婆」であつたり、女性といつても、幾層もある。そこをひとまとめにしてきたために、見えにくくなつていた視界をひらき、こりかたまっていたぶぶんをほぐすことをめざしての、まずは一歩である。

注 (本稿では巻号は略記した。例…第八卷第十号→八一)

(一) 飛騨観光宣伝協議会のポスター。

- (2) 白田甚五郎「女語り」／野村純一編集発行『吹谷松兵衛昔話集』一九六七。
- (3) 稲田浩二「語り爺・語り婆」／稲田浩二・大島建彦・川端豊彦・福田晃・三原幸久編『日本昔話事典』一九七七 弘文堂。
- (4) 水沢謙一「昔話採集のこと」／『昔話ノート』採集と研究一 一九六九 野島出版。初出は一九六〇年。
- (5) 水沢謙一「昔話伝承者の特色についての覚書―百話クラス伝承者―」『日本民俗学会報』四三 一九六六・一。
- (6) 柳田國男「採集期の問題」／関敬吾『高原半島民話集』一九三五 建設社。
- (7) 関敬吾「昔話の傳承」『文学』八一 一九四〇・十。
- (8) 関敬吾「昔話採集と整理」『昔話研究』創刊号 一九三五・五。
- (9) 『昔話研究』誌上に翻訳が載った、ポール・セビヨ「説話と傳説」(會田由訳)は、「男性に比して物語を忘れることが少ない」女性、「自分の子供等に話して聞かせる」女性にふれる(『昔話研究』一八 一九三五・十二)。
- (10) 岩瀬博・太田東雄・箱山貴太郎編 一九八〇 日本放送出版協会。「解説」のうち、岩瀬氏執筆の「(2)長野県の昔話」を参照。
- (11) 自分のフィールドワークをふり返ると、福島県の星絹江さんが思い浮かぶ。星さんは、父親の善次郎さんから多くのムカシを聴き覚えている。
- (12) 「解説」語り手とその周辺」／野村純一・野村敬子編『五分次郎 最上・鮭川の昔話』一九七一 桜楓社。
- (13) 白田甚五郎氏の注2文献を参照。これが、昔話とからめて「男語り」「女語り」について述べた最初であろうか。
- (14) 武田正「みちのくの語部」(一九八八 山形民話の会)では、海老名ちやうさんと、工藤六兵衛さんの語り口について、それぞれ「女語り」「男語り」と呼び、佐久間惇一編『波多野ヨスミ女昔話集』(一九八八 波多野ヨスミ女昔話集刊行会)では、「ヨスミ女の語りは、いわゆる女語りで細かい」と紹介する。
- (15) 丸山久子・佐藤良裕編著 一九七三 三弥井書店。「解説・凡例」のうち、丸山氏執筆の「はじめに」を参照。丸山氏によると、「女話・男話のことは、柳田先生も早くから指摘して」いるという。
- (16) 関敬吾「昔話研究の爲に」『民間傳承』二一三 一九三六・十一。
- (17) 武田正編著『飯豊山麓の昔話』一九七三 三弥井書店。
- (18) 細川頼重編『東祖谷昔話集』一九七五 岩崎美術社。
- (19) 二〇〇六年十二月十六日のブレ研究会にて。第1節に掲げた山田論文を参照。
- (20) 白田甚五郎「序」／野村純一・野村敬子編集発行『萩野才兵衛昔話集』一九七〇。  
(ふじひさ・まな／東京大学大学院)